

日本放送出版協会 刊

未練の文学

二人妻伝承考

檜谷昭彦



NHKブックス

382

檜谷 昭彦 (ひのたに・てるひこ)

1929年 東京に生まれる
慶應義塾大学文学部卒業
同大学院博士課程修了
専攻 日本近世文学
現在 慶應義塾大学文学部教授
著書 『井原西鶴研究』
『生きている敗者—伝承の人間像』
『日本人と嘘』
『いろはかるた物語』(共著)
『ことわざの世界—曖昧さと両義性』

NHKブックス 382

定価 750円

未練の文学 二人妻伝承考

昭和55年12月20日 第1刷発行

〈検印廃止〉 著者 檜谷 昭彦

発行者 藤根井 和夫

印刷 太平印刷社

製本 三森製本

装幀 桺折久美子

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1

郵便番号 150 振替東京 1-49701

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

未練の文学 二人妻伝承考

目次

I 二人妻の構造——1

一 田舎わたらひ——伊勢物語——2

筒井筒の恋 見れば……かなし 「てづから飯匙とる」女

二 化粧する女——大和物語など——14

物語の伝承 元の妻の形象 待つ女のイメージ

三 説話のなかの女たち——今昔物語集など——27

情ある心 田舎人と京女 あまのつと

四 はいずみ——堤中納言物語——40

二人妻説話の定型 「涙川」の歌 民俗のモラル

II 二人妻伝承の転生——53

一 あるべき妻のイメージ——十訓抄から沙石集へ——54

宗家の妻の歌 忍従の徳 理想の女性像

二 土佐守の妻——太平記まで——66

遊女の登場 戦記のなかの二人妻説話 お妻という女

三 佐伯さいきの女——お伽草子——80

髪のかたみ 三年の意味 筑紫人のそらごと

四 入水する女——謡曲『藍染川』『女郎花』など——96

藍染川の女 女郎花の女 死後の妄執

III 措定と反措定

113

一 ふためぐるひ——狂言『花子』など——114

二妻三妻 わわしさとやさしさ 狂言の世界と男の心情

二 五百八十年の愛——近世笑話など——131

本妻のやさしさ 〈観客〉〈読者〉の存在 伝達者の教訓

三 伏見の里と真間の里——西鶴と秋成——150

雑煮箸が呼ぶ慕情 浅茅が宿の妻 未練の情への共感

四 春という女——世間妾形氣——163

「案内しつてむかしの寝所」 お春と二人の夫

神授の玉手箱の意味 お春の修羅と執念

IV

あはれとかなし

185

一 風流について——大和物語・今昔物語集など——186

芦刈説話 男女離別の理由 二人夫説話の悲劇性

二 おんなの修羅——『求塚』の周辺——200

墓名日処女の苦患 処女の霊への鎮魂歌 女の執心と怨念

三 漱石と未練——『草枕』など——215

長良乙女伝説 漱石と『求塚』 『草枕』から『坑夫』へ

終 「見ればかなし」考——『おはん』ほか——231

『おはん』 「みればかなし」と鎮魂歌 未練について

引用文献一覧

245

あとがき

247

I

二人妻の構造

一 田舎わたらひ——伊勢物語——

筒井筒の恋

年齢としおきなくて恋におちた少年少女が、その愛を育てやがて結ばれるという清純な恋物語がある。そのまま温かな家庭がもてて倅こせな生涯が持続するなら、この世にのこす涙もあるまいして怨みも哀しみも遺りのこはすまい。清らかで稚こころないままの愛は、成人し結ばれるまでに長い時間が必要だから、童児の時期から少年少女期を経て、おとなになるまでの愛の持続はなかなか困難だ。時間の重さがあり、ふたりの成長それ自体に伴う酷薄な仕打ちとの対面もある。幼い恋の記憶だけではないまを支えるようにはならないし、清純がのちのちまで清純のままで生きるでたととなるわけがない。別離のはじまりはこうして恋の成就の瞬間に生じるのだが、右の事情をもっとも簡明に伝えたのが『伊勢物語』の二十三段である。これはたいそう有名な話で紹介するにも及ぶまいが、ストーリー内部の個々の事象が、これからの考察にさまざまな関わりをもつことになるから、まず原文を引いてその内実をつぶさに検証することにした。

むかし、田舎いなかわたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりにつれば、男も女も、はぢかはしてありけれど、男は、この女をこそ得めと思ふ。女は、この男をと

思ひつつ、親のあはすれども聞かでなむありける。さてこの隣の男のもとよりかくなむ。

筒井^{つつゐ}つの井筒^{ゐづつ}にかけしまるがたけ　すぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこしふりわけ髪も肩すぎぬ　君ならずしてたれかあぐべき

などいひいひて、つひに本意^{ほんい}のごとくあひにけり。(傍線筆者 以下同)

右の文意を簡単に述べれば次のようになる。「むかし、田舎ぐらしの役人の子どもたちが、井のもとで遊んでいたが、大きくなって男も女もひそかに結婚を夢見るようになった。女のほうでは親がほかの男にめあわせようとしたのだが、女は承知しない。男は決心して女に歌を贈る。井の囲いの筒で高さをくらべた私の背丈も、あなたと逢わぬ間に井筒を越すほど高くなりました、と。すぐに女から返しの歌がきた。あなたと長さをくらべ合つた振分髪も、いまはもう肩を越えるほどに長く伸びました。あなたのほかに誰のために髪上げをしましょうか……。この歌は男の求愛に応えた歌で、ふたりは望みどおり夫婦になつた」というのである。

ここで右本文の傍線部「田舎わたらひ」に注目する必要がある。「わたらひ」とは、生計を立てる、のほかに、世を渡ること、暮らし向き、の意があると『岩波古語辞典』にある。したがつて「田舎わたらひ」は、「都を離れて、ある期間田舎に住むこと」という解が成り立つ(渡辺実氏 新潮日本古典集成『伊勢物語』頭注。まとめてみれば、活計の資をもとめて諸国をへめぐる、一所不住の生活の意味している。このばあい、『伊勢物語』の登場人物たちは、商人や職人の子たちとは思えな

いから、中央から派遣され任国の務めに従事する、いわゆる受領階級ずりようかいきゅうの子どもたちということになる。

「ワタラヒ」の意味が右のごとくであったとすれば、当然これは「ナリハヒ」に対する語とみることができる。同じ生計をあらわす語には、「いとなみ（営）・なりはひ（生業）・すきはひ・わたらひ・よわだらひ（世渡）」などがある（志田義秀・佐伯常磨『日本類語大辞典』。「すぎはひ」というのは、くらしを立てる手段をいうのが主で、身過ぎ・世過ぎと同意であり、商売の意が強いからしばらく措く。「ワタラヒ」はやはりまず「ナリハヒ」に対する語とみてよからう。

そこで「なりはひ」であるが、これは、農作にたずさわって生きることをいう。一定の土地を有し、その土地を耕し、植物を栽培する生活のことである。

飢ゑ疲れたる者、農營ノウエイルこと能はず、産業サンギョウを懈おこたしら令む。（日本靈異記・中巻十六）

のように、田を耕し食物を得てくらしを立てる生活の意味である。そうすると、『伊勢物語』の子どもたちは、農民の子でもないことになるから、かれらが地方官として赴任してきた役人の子どもたちであることはまちがいない。いまふうの言いかたをすれば、サラリーマン階層に所属していたことになる。この階層には技芸・職能のわざがない。なかには『源氏物語』の「帚木はきぎ」という「中の品しな」、中流階級に属する人びとのような、貴族の貴公子の目にとまる幸運な女たちもいただろうが、受領層を中心とするこの階級は、零落者や成上がり者をふくめて、中央官界への昇進を夢見つ

つ、複雑で醜惡な職あさりを繰りひろげる手あいが多かった。彼らが有した技芸・職能は、書・和歌・漢学の才など、いわば文芸の分野に属するものばかりで、当然のことながら世渡りするための手職や技術を身につけていたわけではない。そして彼らは貴族の末端に位置してつねにその関心を中央の官界に向けている。地方の土着の生活に対する関心は、だから旅行者のそれと同様で、「田舎わたらひ」の田舎は、中央を志向する者がいま止むない事情で位置している仮りの生活拠点という意味が大部分を占める。こうして、「ワタラヒ」という語には、中央を志向しつつ、または中央の磁界内にあって、けっしてその外部へ飛び出そうとしない人間の、周縁をめぐむ日々の連続という意味が色濃くふくまれている。『伊勢物語』二十三段の稚い恋人たちは、こうした階層に属する者たちの子どもであった。

二十三段の話は右の前提をすえて次の話に移るのだが、折口信夫の『伊勢物語私記』（全集十卷所収）には、「田舎わたらひ」について、「前略 併しこれは地方官で、京都に住まずに田舎のみをわたり歩いている人などである。それで子供たちも、別れ別れになつて居る」として、地方在住の親たちに別れて、その子どもたちは都にのこつて暮らしているという理解を示している。親だけが任国にいて、子は都に住み別れているというのである。そういう見方も可能だろうが、ここでは『伊勢物語』を現行の形ができあがつた時点で読んでいく予定であるし、次話では男の住所が大和になつてゐることもあり、また続く二十四段の冒頭が、「むかし、男、かた田舎にすみけり」とあることから、この二章が「田舎わたらひ」を主軸にすえた一連の歌物語として並べられたものと理解して、子供たちも親の任地とともに暮らしている情景と受けとることにする。たとえば一条兼良の『愚見

抄』には「田舎にて世をわたりける人の子ともなり」といい、飯尾宗祇の講義を牡丹花宵柏が聞書したという『宵聞抄』では、「田舎にかよひ住事也。ならの京などにや。一向にすむにはあらず」と説いている。中世の知識人の理解はすでにそうだった。

見れば……かなし

さて年ごろ経るほどに、女、親なくたよりなくなるままに、もろともにいふかひなくてあらむやとはとて、河内の国高安の郡に、いき通ふ所出できにけり。さりけれど、このもとの女、悪しと思へるけしきもなくて、出しやりければ、男、こと心ありてかかるにやあらむと思ひうたがひて、前裁の中にかくれるて、河内へいぬる顔にて見れば、この女、いとようけさう（仮粧）じて、うちながめて、

風吹けば沖つ白浪たつた山 夜半にや君がひとりこゆらむ
とよみけるをききて、かぎりなくなしと思ひて、河内へもいかずなりにけり。

ふたりが夫婦になつて倅せな生活を送ったのはさほど長い時間ではない。女のほうの親が死んで生活が不如意になると、男には新しい女ができるようになった。その情人は河内の国、高安の郡（大阪府東南部、生駒山地の南に当たる）に住んでいた。本文にいう、「親なくたよりなくなるままに」は、女の親が死にそのため親からの経済的援助が受けられなくなったことである。したがって次文の

「もろともにいふかひなくてあらむ」は、男も女もこんな窮乏した状態でみじめになつてしまふことをいい、それよりはお互いに現状を打開する方途を考えようとしたのである。『宵聞抄』には、

男女ともにかやうにたづきなくて（生活の手だてがなく）ありへんもいかゞとて、をのくいかやうにもしかるべきかたに成（な）なんなど云ふ心なるべし。（続群書類従本による）

とある。宗祇は右の文に注を加え「女を憐愍の心なるべし」とし、渡辺実氏は「まだ若く生活力のない男は、二人の仲が経済面から崩れることをおそれたのである」（新潮日本古典集成巻と注している）。

そうした理由はなんであれ、夫が新しい女を作つて通うことを、妻がこころよく思うわけがない。ところがこの妻は嫉妬をおもてにあらわすでもなく、素直に男の外出を見送るのだ。謡曲『井筒』の中入で、間狂言に出てくる櫟本の男は、右の主人公を業平、妻を紀有常の息女と見立て次のように語る。

又その頃業平は高安の里にとある女と契り給ひて、高安へ通ひ給ふに、息女は嫉み給ふ心もな
く、高安へ通ひ給ふ折節は、機嫌よくして出で立たせ給ふ間、業平不審に思し召し、もし二心
やあると思し召し。（後略）

と。ここには生活面の困窮や、男が新しい女をもうける理由などはいっさい捨象され、単純に男の

浮氣心を妻が少しも嫉まなかつたという形がとられている。中世以後の『伊勢物語』享受のありようがここに典型化されているので、むかし男を在原業平とはつきり規定し、この段の女を有常女と見立てるところから、業平という色ごのみを亭主にもった女の貞淑な美德が賞揚されるのである。

きげんよく河内通ひの頭巾ぬひ

という川柳はこれを詠んだものである。もういちど原文にもどれば、こうした妻の態度がかえって男の猜疑心を生むことになる。男は、妻がこんなに無邪気なのは、じぶんの留守に別の男を愛する下心があるからなのではないかと邪推した。彼は河内へでかけたように見せかけ、庭の植込みにかくれて妻のようすをのぞき見る。覗きの趣向は日本の古典文学には数多いが、ここの覗きは男と女の心理のあやが微妙に入りくみ、一種の切迫した息遣いがきこえるようである。それにしても男は身勝手だ。高安に女がいて、じぶんはそこへ通って行くふりで、本妻の浮気の現場を目撃しようというのである。こんにちからみればとうてい許される所行ではないし、世間の指弾をあびるところだが、むかしの恋はいまより世間も寛容で、色ごのみの物語として本書を読んでいた読者も、男の身勝手さに腹を立てるほど野暮ではなかった。原文はいう。

(河内へいぬる顔にて) 見れば、この女、いとうけさうじて、うちながめて、

風吹けば沖つ白浪たつた山……

女は、男のでかけたあと入念に化粧した。そして「うちながめた」という。ながむは、ぼんやりとうつろな眼ざしでももの思いにふける意だ。古く霖雨の季節の農耕行事と関わり、田植えの時期の春から夏への往き交いの祭りとも関連し、農作物の根づき・生育を祈念するもの忌みにも関係し、

夫婦生活を一定期間断つことにより精進潔斎のすがたを神に証^{あか}しする民俗の信仰を起源とする。そうした「夫離れ」の状態がもたらすなやましい遣^やる瀬^せなさ、霖雨期の終了を待ちつつ所在なげに送る日常のものの思いを、むかしの人は「ながめやる」と表現したのである。『伊勢物語』の女も同様だろう。夫の留守に色濃く化粧して思いに沈む姿には、当然のことながら女の体臭が感じられるし、性、つまり空閨の哀しみを読みとつてもよい。そして、男はこれを見ていた。女の歌は「風吹けば沖の白波が立つというそのたつではないが、龍田山を夜半にひとりであの人は越えて行くのだらうか」というので、もともとこの物語のためにあつた歌ではないかも知れぬ。歌があつてその歌の由来を語る伝承が伝えられ、歌をめぐる物語がやがて形をととのえるという歌物語の発生は、すでに早く折口信夫が説いている。これもそうした歌物語のひとつが『伊勢物語』にとりこまれたのかも知れないが、『万葉集』巻一の「わたの底沖つ白波龍田山 いつか越えなむ妹^{いも}があたり見む」とか、また巻十二の「君があたり見つつもをらむ生駒山 雲なたなびきあめはふるとも」などに典故が求められるこの歌は、『古今和歌集』の中に収録されていて、この当時すでに物語と結びついて人びとに記憶されていたことが明白だ。歌の内意は、河内へ通う夫の身の安否をただひたすらに案じている妻の心情を伝えている。その妻の真情が、前栽に隠れて盗み見ていた夫の情感をゆさぶった。男は、女のこころねを「かぎりなくなし」と思い河内通いをやめたという。

右の話で、男が女の真情に翻然と目覚める契機は、女のようにすを疑い覗き見をするところと、歌を詠むのを聞いたところにあるようだ。それをつなげる原文のキイワードは、「河内へいぬる顔に見れば」の「見れば」と、歌を聞いたあとでの、「かぎりなくなしと思ひて」の「かなし」で

あるう。ここには、「見れば……かなし」という形が認められるのであって、男が女の姿態をひそかに覗きみる、そしてその真情を知ることにより従前とはちがった情感を女に寄せる、つまり「かなし」と思うといったパターンが成り立っていると考えられる。まずこのことを私は確認しておこう。川柳にいう「下々ならばしみる腹が立田山」という読み方を捨てて、

身にしみる貞心夜半の風吹かば

去り状を呉るといわず風吹かば

と近世の川柳子を読んだ見方に立って、こうした男女の恋のありようを考えてみたらどうなるか。右の川柳は岡田三面子が集めた『日本史伝川柳狂句』(吉典文庫)所収のものだが、『伊勢物語』の話が、連綿と時代々々の読者に読み継がれてきたなかに、じつはその底流となっている日本人の古典享受の様相がひそんでいるのではないかと考える。それを探してみたい、各時代をわたる読者の心意伝承を抽出してみたい、これが本稿の問題点のひとつである。

「てづから飯匙とる」女

ところで『古今和歌集』巻十八「雑歌下」には、題しらず、よみ人しらず、として右の龍田山の和歌が収録されている。それには次のような左注が付いていて、『伊勢物語』の本文と比較すると興味あることが見出せる。

ある人、この歌は、昔大和国なりける人の女に、ある人住みわたりけり。この女、親もなくな